臨床報告

乙字湯により口唇炎が改善した1症例

大竹 実 ^a	吉村 彰人 ^a	前田 ひろみ ^a
伊藤 ゆい ^a	上田 晃三 ^a	土倉 潤一郎 ^a
岩永 淳 ^a	矢野 博美 ^a	犬塚 央 ^b
田原 英一 ^a	木村 豪雄 ^c	三瀧 忠道 ^d

a 榊麻生飯塚病院東洋医学センター漢方診療科, 福岡, 〒820-8505 飯塚市芳雄町3-83

b 医療法人博愛会もち東洋クリニック, 福岡, 〒814-0001 福岡市早良区百道浜2-4-27-3F

c 聖和記念病院, 福岡, 〒838-0102 小郡市津古半女寺1470-1

d 福島県立医科大学会津医療センター準備室 (東洋医学), 福島, 〒965-8555 会津若松市城前10-75県立会津総合病院気付

A Case of Inflammation of the Lips Successfully Treated with Otsujito

Minoru OTAKE ^a	Akihito YOSHIMURA ^a	Hiromi MAEDA ^a
Yui ITO ^a	Koso UEDA ^a	Junichiro DOKURA ^a
Jun IWANAGA ^a	Hiromi YANO ^a	Hisashi INUTSUKA ^b
Eiichi TAHARA ^a	Hideo KIMURA ^c	Tadamichi MITSUMA ^d

a Department of Japanese Oriental (Kampo) Medicine, Oriental Medical Center, Iizuka Hospital, 3-83 Yoshio-cho, Iizuka-shi, Fukuoka 802-8505, Japan

b Momochi Toyo Clinic, 2-4-27-3 F Momochihama, Sawara-ku, Fukuoka-shi, Fukuoka 814-0001, Japan

c Seiwa Memorial Hospital, 1470-1 Hannyoji, Tsuko, Ogori-Shi, Fukuoka 838-0102, Japan

d Fukushima Medical University Preparatory Office for Aizu Medical Center (Oriental Medicine), 10-75 Shiromae, Aizu-wakamatsu-shi, c/o, Aizu General Hospital, Fukushima 965-8555, Japan

Abstract

Otsujito is a well-known herbal preparation used for treating hemorrhoidal disease. However, we considered the anatomical similarities between the lips and the anus, and here report a case of inflammation of the lips with blood stasis successfully treated with otsujito as well.

The case was a 59-year-old woman suffering from eczema on her face and neck. The eczema showed a tendency to improve with herbal treatment, but inflammation and pruritus of the lips continued. Taking into account the presence of blood stasis, we included otsujito in the treatment and her symptoms improved.

Otsujito contains bupleurum, cimicifuga, scutellaria, and rhubarb, which dissipates heat, and angelica, which resolves blood stasis. Therefore, we consider that inflammation of the lips with blood stasis can be treated with otsujito.

Key words : inflammation of lips, otsujito, blood stasis (*oketsu*)

要旨

乙字湯は痔疾患の処方として有名である。しかし、我々は口と肛門の解剖学的類似性に着目し、瘀血を伴う口唇炎に乙字湯が奏効した症例を経験した。症例は59歳女性。顔面・頸部の湿疹を主訴に当科を受診した。漢方治療により湿疹は改善傾向となったが、口唇の炎症と痒痒は持続した。瘀血を目標に乙字湯を合方したところ、症状は改善した。乙字湯には、柴胡、升麻、黄芩、大黄等の清熱薬と血剤である当帰が含まれており、瘀血を主体とした口唇の炎症性疾患にも有効であると考えられる。

キーワード : 口唇炎, 乙字湯, 瘀血

緒言

乙字湯は、もともと原南陽の創方による処方であり、『叢桂亭医事小言』に収載されている。痔の薬として有名な処方であるが、現在用いられている乙字湯

は浅田宗伯が行った加減方で、『勿誤藥室方函』に原南陽の原方から大棗と生姜を去り、当帰を加えたものが収載されている。今回我々は、口と肛門の解剖学的類似性に着目し、浅田宗伯の乙字湯を口唇炎

図1 臨床経過

に応用して症状の改善をみた1症例を経験したので報告する。

症例

患者：59歳，女性

主訴：顔面及び頸部の掻痒感

既往歴：特記事項なし

家族歴：特記事項なし

現病歴：12年前より，顔面と頸部に乾燥性の湿疹が出現。近医皮膚科を受診し，ステロイド外用剤の投与を受けたが効果は一時的であった。X-1年12月に漢方治療を希望して当科を受診。その後，頸部の湿疹は徐々に改善傾向となったが，顔面の湿疹は持続していたため，X年11月に証を再考した。

初診時現症：身長160 cm，体重49.0 kg，血圧117/76 mmHg，脈拍63/分・整，体温36.6℃。境界不明瞭な湿疹が顔面に散在している。滲出液は伴っていない。口唇は全体的に発赤、腫脹しており，一部表皮剥離・色素沈着を伴っている。

漢方医学的所見：暑がりだが手足は冷える。首から上によく汗をかく。便秘あり。痔疾患なし。脈候は浮沈中間，大小中間，やや弱で，舌候は暗赤色で，乾燥した薄い白苔を認めた。腹候は腹力中等度で，心下痞鞭，左右の臍傍圧痛を認めた。

経過：臨床経過を図1に示す。赤みのある湿疹とのぼせの傾向，便秘などを目標に黄連解毒湯加荊芥連翹大黃を投与し，鼻背部，頬部，口唇部を中心とした顔面の湿疹は徐々に改善傾向になった。しかしながら，X+1年2月の旅行を契機に，顔面の湿

疹が増悪。発赤や乾燥が強くなり，掻痒感も高度となった。ここで，黄連解毒湯加荊芥連翹大黃に石膏10 gを加味したが，症状の改善は認めなかった。同年3月，舌の暗赤化や口唇の色素沈着，両臍傍の抵抗圧痛を瘀血の所見と考え，黄連解毒湯に桂枝茯苓丸料を合方したところ，鼻背部，頬部の湿疹は改善。しかし，口唇部の発赤と掻痒感は持続し，腫脹も伴ってきたため，3月下旬より桂枝茯苓丸料を乙字湯に変更したところ，同部の湿疹が速やかに改善し，口唇の発赤，腫脹も消失した。その後，約2年間同処方継続し，時に口唇の乾燥とそれに伴う掻痒感が出現する程度で経過している。

考察

我々は今回発表した症例のほかに，同様の2症例を経験している。1例は47歳女性で顔面の乾燥と掻痒，体幹・四肢の蕁麻疹で受診した。強い瘀血を目標に桃核承気湯エキスと温経湯エキスを併用し改善傾向であったが，口唇の炎症が増悪傾向となり，桃核承気湯を乙字湯エキスに変更したところ，著明に改善した。もう1例は9歳女兒でステロイド抵抗性の口唇の炎症と乾燥で受診した。瘀血と便秘を目標に乙字湯エキスを投与し，約2ヵ月で症状は消失した。この2症例によって口唇炎に乙字湯が有効であることの再現性はあるものと考えた。

乙字湯は，痔の代表的処方として広く日本で用いられている。乙字湯を臨床応用するに当たり，乙字湯の証を記載した文献としては，寺澤捷年が「体力中等度の人の痔疾患で，症状のあまり激しくないも

のに用いる。①便秘の傾向のある場合、②肛門または陰部の疼痛や掻痒を伴う場合、③軽度の出血を伴う場合。]¹⁾と記載している。また、長谷川弥人らは「本方は、体力中等度の人を中心に、比較的症状が激しくない肛門部疾患に用いられる。腹部では、肋骨弓下部の抵抗・圧痛（胸脇苦満）を認めることが多い。一般に、肛門の疼痛・軽度出血・掻痒・便秘などを伴う。」²⁾と記載している。以上から、乙字湯の一般的使用目標は、各種痔疾患とそれに伴う疼痛^{3)~5)}、便秘^{6)~8)}、陰部の掻痒感⁹⁾など、とまとめることができる。

原典である原南陽の『叢桂亭医事小言』巻之七蔵方には、「痔疾、脱肛痛楚、或は下血腸風、或は前陰痒痛する者を理する方。諸の瘡疥、洗傳の薬を禁ず。下部の瘡疥、最も之を忌む。誤て枯薬洗傳し、頓に癒て後、上逆鬱冒気癖の如し。纖憂細慮、或は心氣不定の如き者、并に之を主る。」¹⁰⁾とある。痔疾患に伴う様々な愁訴以外にも、瘡疥と呼ばれる皮膚疾患が外用薬によって治った後に、「上逆」「鬱冒」「気癖」「纖憂細慮」などの精神疾患を生じた場合にも適応があることが記載されており、石原は慢性湿疹を患う62歳の女性が、光線療法を受けた後に神経症状を発症したため、柴胡加竜骨牡蛎湯と乙字湯を投与して効果を得た症例を報告している⁵⁾。

以上より、乙字湯は痔疾患や陰部の掻痒症以外にある種の神経疾患にも有効である可能性があるが、今回我々が報告したように口唇炎に乙字湯を使用した報告は認めず、さらに対象を皮膚疾患に広げて前記の陰部の掻痒症⁹⁾以外の報告は認めなかった。

浅田宗伯の乙字湯は『勿誤薬室方函』に記載があり¹¹⁾、原南陽の原方から大棗と生姜を去り、当帰を加えたものである。浅田宗伯は『勿誤薬室方函口訣』で「此ノ方ハ原南陽ノ経験ニテ諸痔疾脱肛痛楚甚ク或ハ前陰痒痛、心氣不足ノ者ヲ治ス、南陽ハ柴胡・升麻ヲ升提ノ意ニ用イタレドモヤハリ湿熱清解ノ功ニ取ルガヨシ、其内升麻ハ古ヨリ犀角ノ代用ニシテ止血ノ効アリ、此方甘草ヲ多量ニセザレバ効ナシ。」¹²⁾と述べ、柴胡と升麻の湿熱清解、抗炎症作用を強調している。また山本巖は、原南陽の乙字湯と浅田宗伯の乙字湯はその目標とする病態が異なると述べ¹³⁾、原南陽の乙字湯は柴胡と升麻の升提を重視し、痔核脱出と脱肛の治療を第一義としており、浅田宗伯の乙字湯は柴胡・升麻・黄芩で消炎し充血を

制し、大棗を当帰に変えて瘀血を除き、主として痔核の治療に重点を置いている、としている。共通していることは柴胡、升麻の作用に注目していることである。柴胡、升麻による升提作用（脱出する痔核や肛門、直腸を引き上げて元に戻す作用）と消炎作用が痔疾患治療において重要な役割を果たしていると考えることが出来る。

以上のことを考慮すると、皮膚の炎症性疾患に乙字湯を応用する場合は、湿熱清解、抗炎症作用に優れた浅田宗伯の乙字湯の方が適していると考えられる。さらに浅田宗伯によって加えられた当帰には、駆瘀血作用により静脈の血流を改善し充血を除く作用があることから、本症例のように瘀血を伴った口唇の炎症に適しているものと考えられた。

組織学的にみると口唇は、横紋筋と脂肪組織を中心にして、皮膚と粘膜がこれを包んでできている。皮膚と粘膜は赤唇縁において移行し、横紋筋線維である口輪筋が発達している。一方肛門では、直腸粘膜である単層円柱上皮から重層扁平上皮への移行がみられ、その後肛門周囲の皮膚へと連続する。また、横紋筋である肛門挙筋や外肛門括約筋が発達している¹⁵⁾¹⁶⁾。以上のように、口唇と肛門においては、皮膚から消化管粘膜に移行する部位としての類似性と、豊富な横紋筋線維を有するという組織学的類似性が認められる。長い消化管の入り口と出口にこのような解剖学的な類似点を認めることは興味深く、今回乙字湯が口唇炎にも有効であった一つの根拠と考えている。

口唇炎の原因としてはアトピー性や接触性のものが多いが、治療はステロイド外用剤が中心で治療に難渋することも多い。口唇の炎症と瘀血の所見を伴う場合、乙字湯を試みる価値はあると考える。

結語

乙字湯が奏効した口唇炎の1症例を報告した。乙字湯が痔疾患や便秘以外の疾患に使用されることは稀であり、口唇炎に対する使用経験は検索しえた範囲では認められなかった。口唇の炎症に瘀血の所見を伴えば、口唇炎にも乙字湯は有効である可能性が示唆された。

附記 本論文の要旨は第61回日本東洋医学会学術総会（平成22年6月名古屋）において発表した。

今回使用した主な漢方方剤の構成生薬（1日量）、

調整方法と集散地は次の通りである。

乙字湯：当帰6.0，柴胡5.0，黄芩3.0，甘草2.0，升麻1.5，大黄2.0 (g/日)

黄連解毒湯：黄連2.0，黄芩3.0，黄柏1.5，山梔子2.0 (g/日)

症例1は黄連解毒湯合乙字湯として，上記の生薬を600 mlの水に入れ，40分煎じて300 mlとし滓を去り，1日3回に分けて食間に温服させた。

主な生薬の集散地：当帰（浙江省），柴胡（四川省），黄芩（河北省），甘草（甘肅省），升麻（遼寧省），大黄（四川省），黄連（重慶市），黄芩（河北省），黄柏（長野県），山梔子（広西省）

文献

- 1) 寺澤捷年：症例から学ぶ和漢診療学第2版，240，医学書院，東京，2007
- 2) 長谷川弥人，大塚恭男，山田光胤，菊谷豊彦編：漢方製剤活用の手引き，22-23，臨床情報センター，1988
- 3) 小菅周一：産褥期の痔疾に対する乙字湯の投与効果，漢方診療，14，29-31，1995
- 4) 鮎川濯三：症例二例，漢方の臨床，27，5，1980
- 5) 石原明：乙字湯治験二例，漢方の臨床，12，61，1965
- 6) 新井信，盛岡頼子，溝部宏毅：女子医大雑話（123），梔子柏皮湯，乙字湯，白虎加黄連湯，漢方の臨床，51，2004
- 7) 鈴木博子，木村真人，鈴木英朗，葉田道雄，森隆夫，遠藤俊吉：向精神薬投与による便秘に対する乙字湯の効果の検討，東洋医学，28，34-37，2000
- 8) 立山一郎，橋井康二，上能宇伊公雄：妊婦の便秘症に対するカネボウ乙字湯エキス細粒の臨床的有用性の検討，産科と婦人科，60，930-933，1993
- 9) 緒方玄芳：漢方診療おぼえ書（101），肛門部のかゆみと帯下を訴える少女に乙字湯と当帰芍薬散，漢方の臨床，33，1986
- 10) 原南陽：近世漢方医学書集成19，叢桂亭医事小言(2)，大塚敬節，矢数道明編，316-317，名著出版，東京，1979
- 11) 浅田宗伯：近世漢方医学書集成95，勿誤藥室方函，大塚敬節，矢数道明編，58，名著出版，東京，1982
- 12) 浅田宗伯：近世漢方医学書集成96，勿誤藥室方函口訣，大塚敬節，矢数道明編，79，名著出版，東京，1982
- 13) 山本巖：一，乙字湯に就いて，漢方の臨床，26，10-15，1979
- 14) 藤田尚男，藤田恒夫：標準組織学各論，第2版，73-75，医学書院，東京，1988
- 15) 藤田尚男，藤田恒夫：標準組織学各論，第2版，133-136，医学書院，東京，1988
- 16) 小川鼎三，山田英智，養老孟司：分担解剖学3，感覚器学・内臓学，215-216，金原出版，東京，1982